

# 都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

## 著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

## 論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館  
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号  
電話: 0554-43-4341(代)  
FAX: 0554-43-9844  
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

# 十九世紀アメリカの暗黒面を探る ジョン・カルフーンとジョサイア・ノット

A Clue to the Dark Side of America  
in the Nineteenth Century

John C. Calhoun and Josiah C. Nott

儀部直樹  
GIBU Naoki

ハーマン・メルヴィル(1819-1891)が1855年に発表した中編小説「ベニト・セレノ」(“Benito-Cereno”)に魅了された私は、物語を読み返していくうちにこの作品は、特に執筆時に、人種に対するアメリカ白人の支配的イデオロギー形成に絶大な影響力を及ぼしていた十九世紀アメリカ人種学派の存在をめぐりには決して語れないものだと思うようになった。それで作品論に入る前の準備段階として、まずは拙論「メルヴィル文学を読み解く鍵としてのアメリカ人種学派一考察——モートン、コムを中心に——」(『英語英文学論集』第27号, 都留文科大学英文学会, 1999)を書いた。

しかしその後も資料を読み続けていくと、モートンとコムだけでなく、政治家カルフーン、人種学者ノットも作品を読む手掛かりとして不可欠な存在だということに気付き、両者について覚書の形でもいいから整理し書き記してみたくなった。そこでこの場を借りてその作業を行うことにした。従って小論は、いずれの時期に「ベニト・セレノ」論を書くに当たって引用する可能性のある箇所を抽出していく形態をとるため、本格的な論文とは言い難いかもしれないが、必ずや次回予定の作品論への確実な一歩となるようにしたいと思う。

奴隷制度の健全さを強調するのに躍起になっていた南部は、1840年の人口調査(Census)に執着したといわれている。この六番目の人口調査の内容は精神異常者や白痴を列挙したもので、これは直ちに大きな波紋を世の中に投げかける。「この全報告が提出された時、人口動態統計という新しい学問に興味を持っていたマサチューセッツ州出身の若き内科医 Dr. Edward Jarvis (1803-84) は驚くべき発見をした。かれは、北部の白人間と南部の白人間の狂人の発生率には目に見えるほどの違いはないのに、自由州の黒人間での発生率は一六二、四人に一人の割合であるに対し、南部では一五五八人にたった一人の割合である、ということに気付いた。北部での黒人間と白人間の狂人の比率は六対一。南部ではその比率は三対五であった。その若干の数字に疑問を感じつつも、その相違に強い印象を受けたジャーヴィスは以下の推論をした。奴隷制度は(黒人)個々人の『道徳的な能力と知力の発展に驚くほどすばらしい影響を』与えているに違いない。なぜなら『自由に自ら思考し自ら行動するという自主性が享受する多くの希望とそれが荷なわなければならない責任の数々を拒絶することで、当然それはかれ(黒人)を、自らによる積極的な方向決定に

伴う責任義務と危険から救ってくれる』。北部にいる黒人の『迷惑な立場』はかれの『人格』に不穏な影響をもたらした<sup>1</sup>ところがこの推論は崩れることになる。

「この独断的な仮説はさらなる調査の結果、三ヵ月後に幾分ぐらつかされた。北部州向けに報告された精神異常者の著しく多い数に動揺したジャーヴィスは、北部のあらゆる市で作成された報告を吟味し、中には『有色人種の精神異常者がその人種の人口分だけいると報じられた』市がいくつかあったことを知った。これらの誤りは多数の連邦保安官によって書かれた何千もの報告が、整理の際に、ワシントンで発生したことは確信していたけれども、かれは『知らなかったとはいえ事実と反するものを発表したことに失望し悔しかった』。それでもジャーヴィスは、その人口調査における間違いは直ぐに修正されるものと望みを持っていた」(LS 58)。しかしジャーヴィスの考えは甘かった。嘘の数字はすぐに独り歩きを始め、その勢いは誰にも止められなくなっていた。

「意識的にせよ無意識にせよ、その誤りが即座に訂正されるのを期待していたジャーヴィスはあまりに楽観的であったといえる。というのはかれ自身の間違った結論を改正するのも厄介なことではあったが、それ以上にお役所独特の神聖な外套でおおわれた政府の公文書の誤りを質す(purify)のは遙に困難なことだったからである。その人口調査は、北部の白人間よりも黒人間で、また黒人でも南部よりも北部において精神異常者の発生率が断然高いことを示したばかりでなく、それは精神異常者と緯度の相関関係をも明らかにした」(LS 58-59)。自らの過失を認めがらがない役所の体質は今も昔も変わらない。

その人口調査の計算は、メイン州では全黒人の十四人に一人は狂人が白痴で、南に行くにしたがいその数は減少し、深南部では激減する傾向を示していた。この数字に一瞬当惑した多くの人々は、北部地方の冬の厳しさは白人の気質には何ら影響は及ぼさないがアフリカ人種の大脳器官にさわるものと大まじめに推測し、この事態を改善するのに大きな貢献をしているのが奴隷制だと思っただろう。

公文書の誤りに注目してから十三ヵ月後にジャーヴィスは、その人口調査への徹底的な反駁をおこなう。しかし、間違いのあまりの多さ故、今さら政府の権限でその誤謬が公表され、国務省で訂正されたとしても、精神異常者が相当数いると報じられてしまった自由州の住民間で公文書そのものの信用はがたおちしてしまうことだろう、とジャーヴィスは思っていた。「その人口調査からの精神異常者に関する統計がアメリカやヨーロッパで発表されてしまったし、アメリカ人の経験によると奴隷制は『自由でいるよりも精神の健康には十倍以上も好都合である』という噂が『世界中に飛び交』ってしまったとかれは述べた。奴隷たちは、自由は否定されていても自分たちは自由州にいる同胞とは違い『いつ発狂するかもしれないという妄想に縛られずすみ、白痴的言動に陥らずすみ』という確信でなくさめられた」(LS 60)。

ここで注目される人物が議会での奴隷制反対派勢力のリーダーである John Quincy Adams である。かれは国務長官の Abel Upshur とその人口調査の問題について議論をし、その公文書全体の虚偽性をアブシャーに証明した。アダムズの意向で議会がアブシャーにその問題の核心に迫ったが、アブシャーはその二日後に爆死させられる。

そこで登場するのが、殺害されたアブシャーの後任としてタイラー大統領によって国務長官に任命される John C. Calhoun (1782-1850) である。カルフーンは人口調査の真偽についての議会からの要求に答えなければならない。加えてテキサス併合の正当性について

イギリスの外務大臣Lord Aberdeen の質問に答えなければならなかった。奴隷制廃止論の立場に立つイギリスはテキサスも含め全文明世界で奴隷制は廃止されるべきだというイギリスの希望を表明し、テキサスの独立を主張した。

「それに対しカルフーンはテキサス併合条約はすでに締結されたものと公表した。かれは、テキサスでの奴隷制はイギリスもアメリカ連邦政府すらも干渉できない、と突っぱねた。奴隷制廃止はイギリスでは博愛主義に則<sup>のつと</sup>った試みであっても、合衆国では事情が違うと言った。この趣旨を証明するためにカルフーンは恥知らずにも最近の人口調査を引証した。『仮に半世紀以上もの経験が』何らかの意味を持つとしたら、奴隷制廃止は南部州において『思いやりがあるとも賢明とも言えない』だろう。そのわけは『その人口調査やその他の認証された文書が』証明したところによると、自由州における『アフリカ人の状況は改善されるどころか』一層悪化してきているからである。そこでは黒人たちは、心身の苦悩とともに決まって墮落し貧困に陥る。あまつさえ 先例のない程に 聾、盲、精神異常者、白痴』がいる。人種間の『古代からの関係を保って』きた州では、黒人は『あらゆる点で 人数、なぐさめ、知性、道徳において大いに良くなって』きている。カルフーン自身が黒人への同情心を強調するのに利用したのが、その人口調査から無数の数字を羅列することであった。要するに、奴隷制は黒人種を保護するのに必要なものであった。それからテキサス併合は奴隷制を護るのに必要だった」(LS 61)。手段と目的を自在にひっくり返しておいて、自分はこんなにも黒人に心を砕いているのだ、と詭弁を弄するカルフーンの欺瞞がここですでにあらわれている。

「カルフーンは問題をそのままにしておいたとたん、かれはテキサス併合に抗議することでフランスがイギリスの支持に回るのでは、と恐れ始めた。その後アバディーンとは文通を続けなければならないということも予測しつつ、いずれはフランスの外務大臣相手に人種学 (ethnology) に関する講演もしなければならなくなるだろうという可能性が念頭にあったカルフーンは、この演題に関連する最新の科学的な情報を要領よく求めた」(LS 61-62)。そこでかれが最初に接したのがエジプト研究者のGeorge R. Gliddon であった。そのグリッドンは友人 Morton の学説を手紙でカルフーンに紹介する。グリッドンによれば「モートンの研究調査は、『黒人種 (Negro-Races) は太古の昔からずっと従僕 (Servants) か奴隷 (slaves) であり、白人種 (Caucasian) とは常に種類が異なり、またその支配下にいたことを実証した」(LS 62) という。興奮したグリッドンはカルフーンにへつらいの言葉を述べ、人種学のことでならいつでも自分は政治家カルフーンに協力したい熱意を伝えた。かくして思い上がった政治家と舞い上がった学者の危険な関係が結ばれ、アメリカの暗黒面はますます拡大していくことになる。

「グリッドンとモートンと最近の人口調査から得た新しい知識で確信に至ったカルフーンは、パリ駐在のアメリカ人大臣William R. King に次のことを吹き込んだ。黒人の数が少ない地域で奴隷制を廃止するのは、『この劣等人種を自由人の身分に引き上げることにはならない。奴隷制廃止は、黒人から所有者の手厚い保護を奪い取ることになり』、その結果黒人は『劣等な身分に付いて回るあらゆる憂鬱と抑圧をこうむる』運命に会うだろう。これは全く暗澹<sup>あんたん</sup>たる前途であった。しかしかれはこう続けた。黒人が多数いる地域で奴隷制を廃止すれば、その結果生じるのは、西半球全域に及ぶ『人種間戦争』以外のなものでもない『致死の争い』であろう。この戦闘はインディアンも巻き込み、『流血と荒廃の

修羅場をつくり出すだろ』う。大英帝国が宣<sup>のたま</sup>ふのは、真<sup>まこと</sup>に『博愛主義の気の抜けた根拠のない口実』である」(LS 62-63)。グリッドンという強い味方を引き込んだカルフーンは、アダムズの意見を完全に無視し、悪意に満ちた例の人口調査の誤りを質<sup>ただ</sup>そうとはせず、それどころか自らの外交政策の正当化のためにその人口調査を利用し、人口調査そのものも正当化する姿勢を崩さなかった。

カルフーンの人口調査へのこのような異常な執着の背景には、次の考えがあったからではないかと思われる。「いろんなヨーロッパ民族の血統から、合衆国の中に現れるのが、純粋な白人種という同意 (the consensus of a single white race) である。原則としてこの同意は、支配権を握る特権的人種階級をつくり出すためには、個々の白人間における宗教の違いや社会経済上の相違や性差は考慮の対象外におく、ということである」<sup>2</sup> この同意は、たとえ家柄・経済・教養の面で劣等感を持っているブア・ホワイトにも、特権意識という優越感を与える効果がある。『ハックルベリ・フィンの冒険』第六章で、ハックの親父が自由黒人を口汚く罵るのは、この思想が背景にあったのだろう。多少長くなるが、親父の言い分を引用する。「いいか、オハイオからきた黒んぼで市民権を持ったのがいるんだ　白人とかかわらぬくれえ色の白い混血だ。そいつが見たこともねえ真白いシャツを着こんでよ、ピカピカ光る帽子をかぶってやがるんだ。この男が着こんでるような立派な着物を持つてる者は町中に一人もねえくれえだった。金時計に金鎖でよ、銀のにぎりのステッキを持つてるんだ　白髪頭の州きつての金持なんだ。それがどうだ！　大学の先生で、ありとあらゆる国の言葉を喋れて、なんでも知っているという話なんだ。それだけじゃねえ、故郷じゃ投票もできるというんだ。それを聞いておれはかっとなったよ。おれは考えた。この国はどうなんだろうとね。ちょうど、投票日だった。おれは酔っぱらってたもんでそこまで行かれなかったんだが、そうでなかったら行って投票しようと思ってたんだ。ところが、この国にゃ、その黒人に投票を許す州があるとみんなが言ってるじゃねえか。それでおれは諦めた。おれは二度とふたたび投票なんかしねえと言ってやった。その通り言ってやったんだ。人はみんなおれの言うことを聞いてたつけよ。こんな国なんかどうとでもなれ　生きてる限り二度と投票なんかしねえから。おまけにその黒人の図々しいことといたらねえ　おれが押しのけたからいいようなものの、そうでなかったらおれに道を譲ろうともしないんだからな。おれはみんなに言ってやったんだ、なぜ、この黒人を競売に出して売っちゃまわねえのか　そいつを聞かしてもらいてえとね。そうしたら、奴らなんと言ったと思う？　この州に六ヵ月いなければ売るわけにはいかないし、その黒人はまだそれだけになっていないと言うんだ。そうら見ろ　一事が万事だ。州に六ヵ月いなくちゃ市民権を持った黒んぼを売れねえというのが政府なんだからな。こんな政府のくせして自分から政府だ政府だといい、政府のふりをし、政府だと思ってる。それでいてうるつきまわる、盗みを働く、いまいましい白シャツの市民権のある黒人をつかまえるのに六ヵ月ものあいだ、じっとしていなきゃあならねえ」<sup>3</sup>

最初親父のこの不満は、息子ハックの持っている六千ドルを親である自分のものにできなくしている法律に対してであった。そしてかれの怒りの矛先は、その法律を管理する政府へと向けられ、最後にはその感情は、政府と法律に護られぬくぬくと暮らしている自由黒人への憎悪と変わる。ハックの親父の金への執着心は異常であろうし、かれが例のいかかわしい人口調査について知っていたかどうかも定かではない。だがそれは別として、

1850年という作品の時代設定から、想定として「純粋な白人種という同意」を生きる拠り所にしている差別意識の強い南部の一般白人にとっては、人口調査によればひょっとすると「精神異常者」かもしれない自由黒人が自分の目の前をうろつき回るのは、恐怖と憎悪を呼び起こす光景ではなかったか。このことを視野に入れると、親父の主張は特異なものとも思えなくなる。

次に人口調査の関連から、カルフーンと同じ南部サウス・カロライナ出身のDr. Josiah Clark Nott (1804-73) について触れてみたい。ノットは名家の出で、父親は政治家、従兄弟が大学の創設者、兄弟には著名な南部作家がいた。「著しく目立った1840年の人口調査にまつわるその頃の定期刊行物に掲載された莫大な量の憶測の中から、一つの論説がモービルのジョサイア・クラーク・ノットの注意を引きつけた。相当評判の高い内科医であったノットは、今日では黄熱の媒介と病菌理論に関する推測で主に記憶されている。Walter Reed は、黄熱は中間宿主によってのみ蔓延することをノットが最初に示唆したことを認めその功績を讃えた。けれどもノット博士の同時代の人たちはこのかれの医療への貢献にはほとんど注目しなかった。医学界以外の分野で、当時代は人類学の一派『アメリカ人種学派 (American School)』の創始者の一人としてもっばら知られていた」(LS 65)。

1842年までノットは自分の患者をとっても献身的に診る医者だった。ところがその年、ある医学雑誌に寄せられた「黒人とムラートの寿命統計」についての匿名の手紙を目にしてから、ノットの関心の対象が変わる。「1840年の人口調査を基に書かれたこの手紙には、統計学を使って『博愛主義者』が示した内容が記されていた。全民族の中で『純血のアフリカ人』が最も長命に恵まれており、ムラートはそれよりも短命であったこと。ムラートの死亡率は白人や『純血のアフリカ人』のそれよりも年とともに比較的急速に上昇したこと。自由黒人の死亡数は『奴隷のそれよりも百パーセント以上も多』かったこと。さらにこの高い死亡数は、かれらの中に相当数のムラートが存在していることにもっばら原因があること、が述べられていた」(LS 66)。自分自身も博愛主義者の一人と見なすこの手紙の主は、黒人の福利や幸福は奴隷制という衣に包まれ護られていると信じている。

この手紙に触発されたノットは人類学に目覚めた。「ノットは以下のことを発見した。ムラートは白人よりも頭はよくない。しかし黒人よりはました。親の人種よりは丈夫とはいえず短命である。ムラートの女は『とりわけ虚弱で』あり、『多くの慢性病に罹りやすく』そして『繁殖にも子育てにも向かない 大半は全く妊娠しない 妊娠しても大抵は流産するし、産まれた子供は大部分は早死に』している」(LS 66-67)。それからノットはムラート同士の結婚は、ムラートと一方は白人もしくは黒人との結婚の場合よりも子孫に恵まれず、と付け加えた。現在では馬鹿げた考えとしか思えないことが、当時は一般に受け入れられていた。

ノットには、ムラートよりもその親である黒人の方に強い関心があった。「1837年、1839年、1842年とモービル中に黄熱病が猛威を振るった年、ノットは『ごく僅かでも、黒人種と同類の』人間が持っている黄熱病に対する特別な免疫性に気付いた。そこには解剖学上の相違もあった。つまり黒人は、人一倍神経がずぶとく、頭骨の形も違だし、脳味噌は小さめで、顔面角、おまけに『知能的には正常値に満たない』。こういった際立った相違を考慮に入れば、雑種のムラートが『生来、破滅に向かう運命にある、墮落した不自然な子孫』であるということは何も驚くべきことだろうか?」(LS 67-68)。この伝染病に

対する人種の抵抗力の相違について「ベニト・セレノ」で言及されている点から、メルヴィルの人種学派への意識の高さは伺える。

1844年頃にはノットはモートンと共同研究をするし、モービルの知識人グループ相手に講演もする。「『白人種 (the Caucasian) と黒人種 (Negro Races) の博物学に関する二つの講演』は、人類の単一性や多様性の問題は科学的問題であって、事実のみによって決定されるべきものだ、という宣言で始めた。今まで、『真理を語れるくらい十分大胆』だった科学者たちは宗教上の偽善者らによって迫害されてきた。ちょうどガリレオがそう処罰され、かれの科学が禁止されたようになると 多様性を支持するアメリカの科学者らの心に殉教の暗示を鼓吹できる類似の話を用いし ノットは熱っぽく語った。ノット自身迫害を免れるとは思ってもみなかった」(LS 68)。ノットは将来自分に、教会の呪い (anathemas) や災難がふりかかるのを覚悟していた。

1854年にノットは有名な *types of Mankind* を発表する。その導入部分でノットは「人種の多様性 (the diversity of races) は、神学から独立して、また動物界からの類似と推論とも無関係に、一つの事実として科学によって受け入れられなければならない。」<sup>4</sup> と言っている。これは教会の教えとも進化論的な発想とも一線を画す頑な独自の人種観であり、アメリカの暗黒面にさらなる救いがたい闇を重ねさせるドグマである。

奴隷制が廃止された後もノットの差別的ドグマは変わることがなく、むしろ激しくなっていく。「奴隷制は南部の資産を増やしていく手段ではあったものの、その独特の制度は『増大する巨悪』となった。その時点でもまだノットはこう主張した。『黒人種の歴史は博物学の一頁にすぎない 黒人は何の知的な歴史を持たない。なぜならば神は、その種に、書かれた記録を残すのに必要な能力をさずけなかったからである』」<sup>5</sup>

しかしわれわれは「ベニト・セレノ」に登場する黒人奴隷バボの全英知の中に、ノットが吐き捨てた黒人たちへのこの侮蔑の言葉に対する、作家メルヴィルの壮絶な挑戦を見ることができる。

## 注

- 1 . William Stanton, *The Leopard's Sports Scientific Attitudes Toward Race in America 1815-59* (Chicago: The University of Chicago Press, 1960) 58. 以下本書からの引用はこの版による。かっこ内のLSは本書を指し、数字は頁数を示す。
- 2 . Valerie Babb, *Whiteness Visible The Meaning of Whiteness in American Literature and Culture* (New York: New York University Press, 1998) 10.
- 3 . Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, (New York: W.W.Norton & Company, 1977) 26-27. 引用の訳に関しては、新潮文庫『ハックルベリイ・フィンの冒険』(村岡花子訳)を借用させてもらった。
- 4 . Josiah Nott, (the Introduction to) *Types of Mankind in Slavery Defended : the Vices of the Old South*, ed. Eric L. McKittrick (New Jersey: Prentice-Hall, 1963) 132.
- 5 . John S. Haller, Jr., *Outcasts from Evolution Scientific Attitudes of Racial Inferiority, 1859-1900* (Urbana: University of Illinois Press, 1971) 81.